

事例37 単元「マイミュージアムをつくろう」

R—P D C Aを用いた美術科の鑑賞授業を通してはぐくむ活用力 ～学校研究の取組から～

美術 第3学年
羽咋市立邑知中学校

1 事例の概要

(1) 本校の学校研究の概要

研究主題 個に応じた指導を通して、確かな力を身につける生徒の育成

副主題 『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』の実践・検証を通して

本校では「知・徳・体」の調和のとれた教育活動の推進と合わせて、平成14年～16年「文部科学省委嘱事業・学力向上フロンティアスクール事業」及び平成17年～19年「文部科学省委嘱事業・学力向上拠点形成事業」の指定研究の取組を通して、特に「確かな学力」の育成と定着に力を注いできた。その中で練り上げられてきた学力向上策が『邑知システム』であり、その支援策として作り上げられたのが『邑知システムを支える環境づくり』である。これらは、「生きる力」を具現化する方法として、学校内だけでなく家庭や地域にも浸透してきており、特に学力の向上（基礎的・基本的な学習内容の定着）において成果を上げている。

今年度はこれまでの成果と課題を踏まえた上で上記の研究主題を設定し、「確かな力（確かな学力・豊かな心・健やかな体）」の調和の実現をめざした。7年目の実践となった『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』の手法を中心に、今年度指定を受けた「平成20年度児童生徒の「活用力」向上モデル事業・推進モデル校」の内容を踏まえ、学力面における「基礎・基本」及び「活用力」の定着』を中心課題として、より確かな問題解決能力につながっていくよう全教科で実践中である。なお本稿で紹介する美術科の実践は本学校研究に基づいて行われたものである。

(2) 美術科を通してはぐくむ活用力 (Research-Plan)

表現活動は問題解決学習そのものであるために、本校がはぐくもうとしている思考力・判断力・表現力等については、これまでもその実践を重ねてきているとあってよい。しかしながらこれまでの学びや実態をみると、表現活動はもちろんであるが、鑑賞活動の中で活用力に関する実践を行う余地が十分にあると考えた。そこで中教審で示された活動例を参考に、1～3学年の鑑賞授業の中でその具体化を試みた。そして本校美術科が活用力の具体例としてとらえた以下の2つの力が段階的に身につけていくよう、学校研究に即した形での効果的な場面設定を行っていくこととした。

- ・「自分の価値意識をもとに、自分なりの意味や価値をつくりだす際に働く力・想いを深める力」
- ・「自分の思いを大切にしながら、言語や造形表現として表出したり、批評したりする力」

<本校の学校研究の概要>

- A-1 めざす生徒像と指定研究を通して育てたい生徒のゴールイメージ
- A-2 「生きる力」の自校化と『邑知システム』『邑知システムを支える環境づくり』の位置付け
- A-3 本研究の仮説（活用力を身につけた生徒の実現に向けて）
- A-4 『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』について
- A-5 本校の活用力育成に向けたイメージ
- A-6 活用力の育成に向けた『邑知システム』の取組について
- A-7 活用力の育成に向けた<アウトプットー表出の場面>の取組について
- A-8 『邑知システムを支える環境づくり』の取組について

2 実践内容 (Research-Plan)

美術科 3年「マイミュージアムをつくろう」

- B-1 題材の目標
- B-2 題材計画
- B-3 指導法の工夫 (題材観・生徒観・指導観・評価観)

3 指導の実際 (Do)

- C-1 指導案 (B-2 題材計画の第三次の一時間目)
- C-2 どこでもミュージアムPART Iの様子
- C-3 生徒の学びの成果

4 成果と課題、そして新たな手だての構築へ

(1) 成果 (Check)

- ・思考力、判断力、表現力等について

C-3の成果からも分かるように、「みる」際に思考力・判断力・表現力等を働かせて取り組んでいたことが十分に伺える。生徒自身にもそれらを学び、力をつけたという実感があることから、この実践が生徒の活用力を伸ばしたと言ってよいだろう。

- ・言語活動の充実について

美術科における言語活動の充実という視点では、色や形についての意識の高まりが、造形言語の表出として、生徒の言葉から読み取ることができるようになった。

(2) 課題 (Check)

- ・評価について

生徒の活用力の育ちについて、今回の実践では「生徒の意識の変化」と「造形言語の質の深まり」という観点から見取りを行った。評価規準の見直しも含めて、多角的にその育ちをとらえることができるようにしていかなければならないと考えている。

(3) 新たな手だての構築へ (Action)

① 基礎・基本の更なる定着について

活用力をはぐくむ場面をより効果的にしていくためには、基礎・基本の確実な定着が必要であることを再確認することができた。計画の中に位置づけた活用力をはぐくむ活動を支え、深めていくための基礎・基本の学習内容を再点検し、その充実も図っていかなければならない。また、今以上に教師自身が基礎・基本の定着と活用力の育成との双方向の関係を意識した中で、授業改善を図っていかなければならない。

② 教材の系統化と生徒の学びの実感について

今回の成果のあった取組を系統化して、他学年にも広がっていくように年間計画の中で位置づけていきたい。そしてそれを学んでいく生徒自身に『学びの実感 (活用力の面白さの実感)』が深まっていくような授業改善の工夫を次年度は整備していきたい。

③ 評価について

生徒の育ちを見取る手がかりとなる資料の収集の更なる充実を図っていく。